

知多半島で効率的な施設花き経営を実現 ～自分で選んだ道を全うし挑戦し続ける～

武豊町 有限会社バラ屋（森田広幸さん）
施設花き（ミニバラ）

【平成 29 年 8 月 31 日掲載】

知多半島の武豊町において、ミニバラを生産している有限会社バラ屋の森田広幸さんをご紹介します。

自分は鉢花農家になる！

森田さんは昭和 40 年に水稻とミカンを生産する農家に生まれました。当時武豊町の水田は区画が小さく、作業効率が悪く、畦畔の管理に非常に労力がかかっていました。そこで、就農にあたって、水稻経営をそのまま継ぐのではなく、他部門を起こそうと考え、幅広く勉強しました。農業大学校において花きを 2 年間、養鶏を 2 年間学び、卒業後にはドイツに渡り、花きや野菜の大規模施設経営を研修してきました。



森田広幸さん

帰国後就農し、両親の仕事を手伝いながら、今後の経営について検討しました。ドイツで見てきたことを元に、「施設花きは、作業を効率化すれば小規模でも経営が成り立つ。さらに、高設のベンチで栽培する鉢花ならば立って楽に作業できるため、雇用も活用しやすい。」と考えるに至りました。鉢花生産を新たに始めるには初期投資が大きく、栽培技術にも不安があったため両親は大反対でしたが、「自分の人生は自分もの」と反対を押し切って決断しました。

栽培技術を学ぶため、ミニバラの先駆的生産者である岐阜県のセントラルローズに飛び込んで研修生となりました。家の水稻やミカンの生産を続けながら、研修を受ける日々を 2 年間過ごした後、平成 4 年、森田さんが 28 歳のときに、とうとうミカン畑の一角に温室を新設し、ミニバラ生産を開始しました。

作業の効率化と省力化を実現

森田さんは、制度資金の活用と金融機関の融資により、1 年に 1 棟のペースで計画的に温室を増設しました。施設用地は、元は傾斜のあるミカン畑でしたが、自ら重機を用いて傾斜や段差を徹底的に整備しました。さらに、温室を立てる際には、ドイツの施設園芸を参考に、動線に十分配慮し、向きを揃える、間口を同じ間隔にするなど、作業の効率化と省力化が実現できる施設としました。



山を切り開いて平らに整備した段差のない敷地



温室の向きや長さを揃えて設置
(地図データ: DigitalGlobe)

効率的な栽培技術の確立

ミニバラ生産を開始した当初は、一番の需要期である母の日の直前にべと病が大発生し出荷不能になったり、梅雨の晴れ間に温室内が高温となり1棟分全部を枯らしたりと、大失敗をしました。これらの経験から、温室環境や植物をよく観察して、植物の生育に真摯に向き合うようになりました。また、効率的に栽培できるよう、育苗環境や期間、鉢上げのサイズ、商品にするまでの期間など実証し、栽培技術を確立していきました。現在は、栽培方法の基準ができ、9月から翌6月まで安定して出荷できるようになりました。栽培期間が基準より長くかかるときは、露地に出して休眠させ温室の回転率が低下しないよう工夫するなど効率性を高めています。

様々な取組が功を奏し、平成20年には施設面積5700m²、夫婦2人と常時雇用11名、ミニバラ38万鉢を生産する経営体に成長し、経営が安定しました。施設の整備のため、多額の資金を活用しましたが、順調に返済できています。「返済は本当に大変だったが、モチベーションの維持になった。」と、話してくれました。

経営のさらなる安定のため

年間通して収入を得られるよう、ミニバラの出荷がない時期に販売できる品目として、ヒイラギやブルーベリーの苗を試作し、平成25年にはヒイラギ4万鉢、ブルーベリー2万8千鉢、ブラックベリー5千鉢を販売できるようになりました。これら副品目においても効率性を高めるため、今年は、ブルーベリーの苗を通常5寸(15cm)鉢で出荷するところ、4寸(12cm)鉢にして栽培期間の短縮に取り組んでいます。年間通して収入を得ることで、技術の高いパート従業員の継続雇用にもつながっています。



露地ベンチに並んだブルーベリー

地域の若手生産者を支援していく

有限会社バラ屋には後継者がいないため、将来について、第三者に譲るか完全に辞めるかなど思案中です。

一方で、地域の若手生産者が経営を続けていけるように、支援すべき立場にあると考えています。農業経営士の地区代表や県花き生産者連合会の知多地域の副会長などの役員を引き受けるとともに、次の世代につながる新しい取組を提案及び実践しています。平成26年に中部国際空港で行われた「あいち花フェスタ2014」では、花材の調達や飾り付けの指揮を執って、若手生産者とともに取り組みました。関係者からは、「ベテラン生産者が戦陣を切って取り組む姿勢を若手生産者に示し、大規模なイベントを成し遂げてくれた」と高い評価を得ました。「自分は、好きな人生を選び、同業者や周囲の人と助け合ってやってきた。今後も若い人たちが夢をかなえられるよう、周囲が支えていかなければならない。」と、意気込みを語ってくれました。



順調に花を付けて出荷を待つ
ミニバラ

執筆：農業経営課
取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課